

ロビン・フッドと焼物師

- 1 夏になると若葉が芽吹き
枝えだは花をつける
明るい緑の森でいっせいに
楽しげに鳥はさえずる
- 2 聞け 心正しきヨーマンたち
男前で礼儀正しく 徳高く
弓を持つては最高の男
- 3 その名はロビン・フッドと言いました
- 4 ロビン・フッドという名のヨーマンは
礼儀正しく男前
我らがマリア様への敬愛のため
すべての女性を崇めていました
- 5 そのロビン・フッドがある日のこと
陽気な手下たちといたところ
一人の焼物師がやつてきました
草地を超えてやつてきました
- 6 「思い上がるがつた焼物師がやつてくる」とロビン
「長年この道をうろついているが
やつは礼儀というものを知らぬ男
一度も^{せきせき}関錢を払ったことがない」
- 7 「あれはウェントブレッグで会つた男」とジヨン
「なにをしてかすか分かりませんぞ
やつめ 三度もわしに打ちかかり
この脇腹に傷を負わせた男
わしらの中のだれ一人
- 8 「四十シリング賭けてもよい
この暑い日に賭けてもよい
あの男から^{せきせき}関錢が取れる者などおりはせぬ」
- 「ここに四十シリングある」とロビン
「望むならもつと払ってやろう
あの思い上がるがつた焼物師に

わしが関錢を払わせてみせようぞ」

9 掛錢が集まりました

皆がロビンに賭けました
ロビンは焼物師の前に立ちはだかって
そのゆく手を遮りました

10 焼物師の馬に手をかけて

一步も動くなと命じました
ところが焼物師はぶっきらぼうに言いました
「いつたい何のご冗談」

11 「こ」の三年 いやもつと」とロビン

「貴様はこの道を我がもの顔に通つてきた
礼儀正しき男にあるまじきこと
ただの一度も関錢を払わずに」

12 「お前の名前は何という」と焼物師

「どこのどいつだ わしに関錢などと」「
わしの名前はロビン・フッド
貴様が関錢を払うべき男」

13 「びた一文払わんぞ

関錢なぞ 笑止千万

わしの馬から手を離せ

目にもの見せてくれようぞ」

14 焼物師は自分の荷台のところへゆくと

迷うことなく円い盾を手にとりました
それから頑丈な杖をつかみ上げ

ロビンの前にさつと立ちはだかりました

15 ロビンは弓のようすに反った剣と

円い盾をつかみました

焼物師がロビンにおどりかかり

「わしの馬から手を離せ」と叫びました

16 それから二人のヨーマンは
見るも見事な闘いぶり

ロビンの手下の者たちは

木の下で立ちつくしていました

17 リトル・ジョンは仲間に向かって言いました

「あの焼物師め なかなかやるわい」

焼物師は手にもつた円い盾で

恐ろしい一撃をくりだしました

18 ロビンはぐらりと体勢くずし

円盾を足下に落としました

次の一撃を首にくらい

ロビンは地面に倒れました

19 木の下でロビンの手下の者たちは

そろってこれを見ておりました

「お頭かしらを助けよう」とリトル・ジョン

「あの焼物師を殺すのだ」

20 手下たちは剣を手に

ロビンのもとに駆けつけました

リトル・ジョンが言いました

「掛け銭かけせんはだれの手に

21 「どうやら掛け銭かけせんの半分はわしのもの

お頭かしら 一十シリングはこのわしのもの」

「二十シリングでも百シリングでも」とロビン

「掛け銭かけせんはすべてお前にくれてやる」

22 「礼儀知らずとはこういうものと

賢人が言うのを聞いたことがある」と焼物師

「貧しいヨーマンがやつてきたら

旅の邪魔立てすることは相成らんと」

23 「正まことしくあなたの言われるとおり」とロビン

「それこそがヨーマンの精神だ

これからはいつでも好きなどきに

構わずこの道を通られるがよい

24 「ひとつ願いがあるのだが

お近づきの印として

わしと服を交換してはもらえぬか

わしがノッティンガムへゆこうではないか」

「よいでしょう」と焼物師

「これからは良き友として
もし焼物を上手くさばかれたなら
必ずここに戻ってこられよ」

「このわしを信じられよ」とロビン

「さもなくば この身を呪われよ
もし焼物をそのまま持ち帰ったなら
かみさん連中にも馬鹿にされよう」

ロビンの手下の者たちは

心をこめて言いました

「ノッティンガムの代官には用心なされませ
おそばにわれらはおりませぬゆえ」

「さあ出発だ」とロビンが言いました

「お前たち わしは一人でゆくぞ
マリア様がお守りくださる
無事ノッティンガムへいってまいる」

ロビンは焼物を売るために

ノッティンガムへ向かいました

焼物師はロビンの手下たちと後に残りました
恐れる様子などありません

ロビンはノッティンガムへ向かいました

「氣持ちの良い季節でした
お話はまだまだ続きます
お楽しみはこれからです

ロビンはノッティンガムへやつてくると

お話するのはうそ偽りない真実ですが
ロビンは馬を止め
カラスムギとほし草を食べさせました

31

30

32 町の真ん中へやつてくると

ロビンは焼物を並べました

「焼物だよ 烧物だよ」

開店祝いだ 安いよ安いよ」

33 ロビンは代官の家の門の鼻先で

商売を始めたのでした

かみさん連中が集まってきた

さつそく値切り始めました

34 「大安売りだよ」ロビンが叫びます

「大安売りだよ もつてけ泥棒」

見ていた連中が言うことには

焼物は飛ぶように卖れたとか

35 焼物は五ペンスの値うちもの

それをロビンは三ペンスで売ったのです

男も女もささやきました

「あんな商いじやあそう長くは続くまい」

36 あまりに飛びるように卖れたので

焼物はあと五つを残すのみとなりました

ロビンはそれを取り上げて

代官の奥方のところへゆきました

37 奥方はとても喜んで言いました

「これはどうもありがとうございます

もしまだこの町へ来ることがあれば

きっとあなたの焼物を買いますよ」

38 「ではその折にはとびきりの逸品を」

ロビンは神と子と精霊に誓つて言いました

すると奥方は丁重にロビンに言いました

「わたしたちと食事をしていらっしゃいな」

「これは神のお恵みだ」とロビンは言いました

「わしらの祈りが通じたものか」

女中が焼物を運んでゆき

ロビンと奥方がその後をゆきました

39

38

37

36

35

34

33

32

40

ロビンが広間にやつてくると

そこにいたのは代官でした
焼物師は深々とおじぎをしました
代官もあいさつを返しました

41

「見てあなた この焼物師がわたしたちに

小さくて素敵な焼物を五つも」

「よう参った」と代官が言いました

「手を洗つてさつそく食事じや」

42

皆が食卓につき

堂々と乾杯したとき

代官の家来の二人が

大きな賭けの話をしました

43

先ごろ決まったことですが

ある大きな賭け射的で

なんと四十シリングも

勝者が得るというのです

44

黙つて聞いていた大胆な焼物師は

こう考えました

「忠実なキリスト教徒として

その賭け試合を見てやろう」

45

パンとエールとワインとで

最高のごちそうを味わった後

皆がわいわい弓と矢を手に

われ先にと射的場に向かいました

46

代官の家来たちはさつと矢を放ちました

良き射手が皆そうするように

しかしだれも的を射貫くことができませんでした

まるまる弓の長さの半分もはずしました

47

すると大胆な焼物師は立ち上がり

こう言つたのでした

「わたしに弓をお与えください

ひとつ試してご覧にいれましよう

「では試してみるがいい」と代官が言いました

「三本のうちで一番強い弓を持て

見たところお前も屈強な体つき

お前が自ら射てみせよ」

49 代官は近くに立っていた家来に命じ

弓を持ってこさせました

家来が持ってきた一番強い弓に

ロビンは弦をかけました

50 「さあ 手並みを見せてみよ

即刻構えて射るがいい

「神よ お助けください」と大胆な焼物師

「このか弱き弓にお力を」

51 ロビンは矢筒に歩みより

良い矢を一本選びました

そうして的めがけて放った矢は

一フイートもはずれませんでした

52 再び代官の家来とロビンとで

矢を放つたのですが

ロビンは決して的をはずしません
ついに的を三つに割りました

53 代官の家来たちは赤っ恥

勝者はなんと焼物師

代官は満足気に笑って言いました

「焼物師よ お前の勝ちだ

54 · · · · ·

「お前こそ弓を持つにふさわしい
お前のゆくところ どこであろうとも

55 「わたしは荷台に弓を持っております
実際に素晴らしい弓でござります

その弓をわたしにくれたのは
ロビン・フッドでございます」

「お前はロビン・フッドを知つておるのか
知つておるなら教えてくれい」
「百度といわすあの男とは約束の木の下で
ともに矢を射てきた仲」

「百ポンド積んでも惜しくない

神と子と精靈に誓つてもよい

・・・・・

あの極悪の無法者に会わせてくれい」

「それならば わたしの言う通りになされませ
思いきつてわたしとともにおいでください
明日の朝食の前にでも

ロビン・フッドに会えることでしょう」

「それはありがたい」と代官は言いました

「どうかうまくいきますように」

射的は終わり 皆家に戻りました

食事の準備はすっかり整っていました

翌朝 阳がのぼると

焼物師は馬の準備を整えました

さつさと荷台の支度も整えました

あとは一時も早く出発するのみ

ロビンは代官の奥方に別れを告げました

数々のもてなしに感謝しました

「奥方さま わたしの感謝の気持ちを込めて
この金の指輪を差しあげます」

「これはどうもありがとうございます」と奥方が言いました

「あなたに神のご加護がありますように」
代官の心はすでにここにあらず
森へと飛んでいたのでした

こうして代官は森の中

緑の木の下にやつてくると
ぎつしりと茂った葉の中できえずる鳥の声に
楽しげに聞き入りました

64 「陽気なところでございましょう

のんびりしたい者には最高の場所
この笛を吹けば

ロビンがいるのかどうかがわかります」

65 ロビンは笛を口にあて

思いきり吹いたので

笛の音は森中に響きわたり

ロビンの手下の者たちの耳に届きました

66 「今聞こえたはお頭かの笛」とリトル・ジョン

・・・・・

皆みな一目散に駆けつけました

67 皆みながロビンのもとへやつてくると

リトル・ジョンがまつ先に言いました

「お頭かノッティンガムはいかがでした

焼物は売れましたかな」

68 「わしを疑うか リトル・ジョン

なにも心配することなどありはせぬ
ノッティンガムの代官どのをお連れした
これほど上手まい商いがあろうか」

69 「それはようこそ」とリトル・ジョン

「なるほど上々の商いですな」
代官は百ポンド積んでも惜しくありません
ロビンに会わずに済んだなら

70 「もしノッティンガムの町にいたときに

これが分かっていたならば
この美しい森に来る馬鹿などおりはせぬ
過去千年探してもおるわけがない」

「わしにはよく分かっておった」とロビン

「上々の首尾を神に感謝しよう

それでは馬をちようだいしよう

それから他の持ち物すべて」

「この悪魔め」代官は言いました

「身ぐるみ剥がされるとはなんとしたこと」

・・・・・

「意氣揚々と馬でやつてこられたが

帰りは足で歩かれよ

奥方には大変世話になつた

よくできた奥方様だ

「奥方には白い馬を差しあげよう

しなやかな歩調は請け合いで

・・・・・

「奥方には白い馬を差しあげよう

しなやかな歩調は請け合いで

奥方の情愛に免じて

お前はこれで許してやろう」

こうしてロビンと代官は別れました

代官はノッティンガムへ帰りました

代官の帰りを迎えた奥方は

夫に向かつてこう言いました

「緑の森はいかがでした

ロビンは連れてこられましたか」

「くそったれめ

やつに大恥かかされた

「緑の森に持つていった物すべて

やつに奪われてしまったわ

そしてこの美しい馬は

やつからそなたへの贈り物」

すると奥方は声をたてて笑いました
そしてキリスト様にお祈りしました

「ではあなたはロビンがくれた

焼物の代金を払われたのですわ

「」うして帰つてこられたのです

良かつたではありませんか」

さあ最後に緑の森の

ロビンと焼物師のお話をいたしましょう

「焼物師よ わしが売った焼物は

「一体いかほどの値うちもの」

「あれは一ポンドの三分の一」と焼物師

「したがつてお互いまる儲け

稼ぎは二人で山分けじや

分け前を さあこれに』

82 「さあ 十ポンドだ」とロビン

「真っ当な金で十ポンド

いつでもこの緑の森に来られよ

焼物師よ そなたならいつでも歓迎だ』

83 こうしてロビンと焼物師は別れました

緑の森の木の下で

神よ ロビンの魂にどうかご加護を
すべてのヨーマンに身の安全を